様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：１３１０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2022
課題番号：１６Ｋ１６７５８

研究課題名（和文）新出資料を含む『夜の寝覚』を基点とした文学史再構築のための研究

研究課題名（英文）A study on the reconstruction of Japanese literary history centered on Yoru no Nezame with newly found materials

研究代表者
高橋　早苗（鈴木早苗）（TAKAHASHI, Sanae）

新潟大学・人文社会科学系・准教授

研究者番号：１０６２５１２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：１１世紀後半に成立した『夜の寝覚』は、物語の前半にある中間部分や結末にあたる末尾部分に欠巻を抱える物語である。だが欠巻部分の内容を補う資料（既出資料と2014年に発見された新出資料）により、作品理解を深めることができる。考察を進めた結果、〈繰り返し〉〈老い〉〈仏教〉という観点から『夜の寝覚』を文学史に位置づける見通しを得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
『夜の寝覚』研究は現存部分のみを対象とすることが多い。だが欠巻部分をも含めて検討し、他作品との関係性を探ることが重要であり、〈老い〉〈仏教〉に関する考察はその大きな手がかりとなる。また従来、作品に特徴的な多数の心理描写は主人公の心を描く主題に関わるものと捉えられてきた。しかし他の人物の心理描写や会話文との関係に見られる〈繰り返し〉に目を向けることで、多数の心理描写は作品を展開するうえでの方法であることを明らかにした。以上の成果は、『夜の寝覚』の偏向的な研究傾向や通説に問題提起し再考を促すものとなった。

研究成果の概要（英文）：Yoru no Nezame is a narrative that has some missing parts or volumes in its first half and ending.But with a help of materials filling in lacunae we could deepen our understanding of the narrative.
In conclusion, themes such as "repetition", "old age" and "Buddhism" could contribute to reconstructing the Japanese literary history centered on Yoru no Nezame.

研究分野：平安文学

キーワード：夜の寝覚　欠巻　平安後期文学　文学史　王朝物語

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究の萌芽は、王朝物語の頂点に立つと言われる、11 世紀初頭に出現した『源氏物語』の検討と物語史上の意義付けを行ったことにある。その過程で、のちに登場する王朝物語群もまた単に『源氏物語』を模倣するのではなく、それぞれ固有の物語世界を構築しているのではないかと考えるようになった。

その後『源氏物語』の強い影響下にある作品として『夜の寝覚』を取り上げたことを契機として、欠巻部分を持つ『夜の寝覚』の偏向的な研究傾向を認識するに至り、2013 年に科研費若手(B)「欠巻部分を持つ平安後期文学の研究」を申請し交付された。当該科研は、既出の外部資料などの分析をもとに、これまで考察の対象から取りこぼされてきた欠巻部分の内容を踏まえることで、物語全体の構造の捉え直しを図ろうとするものである。そんななか 2014 年に『夜の寝覚』欠巻部分の一部そのものが発見された。この新出資料は失われた内容の復元に寄与するだけでなく、従来看過されてきた他の未詳資料群との関連性をも示す点で重要な意義を持つものであった。よって新出資料に軸を置いたさらなる研究の遂行が課題となったが、当該科研の実施期間では当初計画した既出資料の検討・分析に留まらざるを得なかった。また、既出資料の分析により既に明らかにしえたことの一つに、欠巻部分での〈女君の出家の達成〉がある。これに焦点を当てると、『夜の寝覚』は従来言われてきたような男女の仲を嘆くだけの物語とはならないうえ、同様のモティーフを持つ他作品との繋がりも見えてくる。ここから他作品との関係性において作品の新たな側面に光を当てることの意義を改めて認識するに至った。よって、今後は新出資料を含めた作品検討と他作品との比較分析に取り組む必要性を強く感じた。

２．研究の目的

本研究は今まで限定的に論じられてきた『夜の寝覚』を中心とする平安後期物語を対象とし、欠巻部分の内容を新出・既出あわせた複数の資料から確実に補い、かつ確定したうえで、現存部分と欠巻部分とを切り離すことなく統括・包括的な視点から作品全体の構造を捉え直し、物語史上に位置づけることを目的とする。

３．研究の方法

本研究課題において骨格となる作業は、（１）欠巻部分に関わる資料を検討・分析したうえで、（２）作品全体を捉えるための分析視点の有効性を多角的に検証し、（３）諸作品との比較考察を通して文学史的に位置づけることである。

（１）欠巻部分に関する検討・分析は、2013 年に申請し交付された科研費若手(B)「欠巻部分を持つ平安後期文学の研究」における成果を踏まえ、新出資料についての検討・分析も行う。また、（２）作品を包括的に捉える分析視点を抽出し、歴史的・物語史的に意義をもちうるのか検証する。さらに（３）諸作品との緻密な分析・考察を行う。『源氏物語』を含む平安前期作品や、同じ平安後期文学作品同士での比較・検討と、さらにはそれ以後の文学作品の調査に取り組むことで、新たなる文学史的展開についての考察を深める。

４．研究成果

当初は 2016 年度から 2018 年度までの 3 年間を予定していたが、次の 2 点の理由により 2022 年度まで延長申請を行った。理由の 1 点目は、2 度の出産に伴う産前産後の休暇・育児休業の取得による（2016 年度、2019 年度）。2 点目は、新型コロナウィルスの感染拡大による。後者が本研究に与えた打撃は相当なものであった。対面がほぼ不可能となった状況が続き、それに対応するべく授業等の大学業務に割く時間が激増し、なおかつ出張なども行えない状態であった。そのため「新型コロナウイルス感染症の影響に伴う科研費（基金）の補助事業期間の延長」に該当するとし、延長申請を行い認められた（2020 年度、2021 年度）。

上記のように研究活動を進めることのできない時期があり、特に新型コロナウィルスの感染拡大により外出を控えざるを得ず、方法（１）の一部として予定していた新出資料に関わる調査がほとんどできなかったことは痛恨の極みであった。だが、一方で先に入手していた資料や現存部分をもとに作品内部の分析、他作品の検討・考察は地道に進めており、それによって次のような成果を着実に得ることができた。

（１）王朝物語史における位置づけの検討

『夜の寝覚』の現存部分を中心とした考察を行うことを通して、王朝物語史における当該作品の位置づけの一端を探ることができた。注目したのは、『夜の寝覚』の特色の一つである物語文学の中でも群を抜いた心理描写の多さである。作品の第三部にその傾向が強く、寝覚の上の「心」の掘り起こし、「心」の深化を描くことが「物語の中心」にあるという見方も広く知られている。

だが「心」の掘り起こしとは異なる観点から『夜の寝覚』における心理描写について考察することで、作品の特質を明らかにできることを「『夜の寝覚』の心理描写―〈繰り返し〉の手法―」（『国語と国文学』95-7、p22-36、2018 年 7 月）に発表した。寝覚の上の心理描写にのみ着目するのではなく、続けて記される彼女の発言（会話文）や、寝覚の上の心理描写の後に置かれる他の人物の心理描写に留意し、それらとの比較・対照を通して、他者との関わりのなかで『夜の寝覚』の心理描写がどのように機能しているのか、その役割の一端を明らかにした。

具体的には心理描写と会話文を並置してその相違を示すという手法により、人が人と関わるうえでの機微を伝える〈趣向〉がほどこされていること、そして時にその相違は、後の物語展開に深く関わる伏線のような役割を果たしていることである。また、対面する二人の心理描写を交互に並べるという手法は、彼らの関係性を示唆するものとして機能する場合があり、同じ手法を重ねることで、解決可能なすれ違いを経験した男と女が、解決不可能なすれ違いへと追い詰められてゆく姿が浮き彫りになってくる。彼らが容易には解きほぐしがたい関係へと向かっていることが、心理描写の並置という観点から改めて確認できるのである。こうした心理描写と会話文、心理描写と心理描写の並置による相違の提示とは、〈繰り返し〉の方法と言い換えることもできる。『源氏物語』に見られる〈繰り返し〉は重ねることでより強調する効果を持つのに対し、『夜の寝覚』の場合は〈繰り返し〉によって相違を際立たせるものであることに注目した。これによって物語は他者との交錯や断絶のありようを愚直に描き出そうとしていることを指摘し、それ以前の現存する作品とは異なる、『夜の寝覚』が挑んだ「方法」であることを明らかにした。

（２）比較を視野に入れた他作品の分析・考察

『夜の寝覚』作品自体の考察と平行して、他作品との関わりという点からの分析も必要である。最終的には『夜の寝覚』を王朝物語史に位置づけるべく、重要な観点として〈老い〉と〈仏教〉を取り上げ、まずは他作品における考察を行った。

『夜の寝覚』は寝覚の上と男君との関係を主として語るが、言うまでもなくこの男女二人だけで物語が進むわけではない。寝覚の上を溺愛する父入道や寝覚の上の（世間的には）最初の夫となる老関白が深く関与することで、物語は大きく進展する。注目したいのは父入道も老関白もともに「老い」を抱えた身であることだ。この特色を視野に入れたうえで、まずは他作品の「老い」に関する考察として「『源氏物語』幻巻の「梅」「かざし」の贈答歌―御仏名の光源氏の〈老い〉―」（『日本文学』68-5、p33-43、2019 年 5 月）を発表した。

従来、幻巻巻末の光源氏については御仏名の前後の描写が注目され、悟りか迷妄かといった議論がなされてきた。本論では御仏名において光源氏が導師と交わした贈答歌に着目し、仏名歌の系譜と「梅」を「かざす」という観点から、光源氏の心境を読み解いた。余生を意識するからこそ二度とない「今日」にこだわり、来年の「春」を先取りする形で「梅」を「かざす」光源氏の思いは、俗世への決別の思いを持つがゆえに「今日」へのこだわりをみせており、悟りか迷妄かといった二者択一にたやすく回収しえないものであることを指摘した。また彼の思いとは別に、この歌が「梅」を「かざす」歌であるがゆえに、聞き手に〈老い〉を想起させるものであり、導師の返歌もそれを看取していた可能性を指摘したうえで、贈答歌が当該場面に置かれた意義を明らかにした。超人的な主人公である光源氏の〈老い〉は、ひそかに贈答歌に潜ませる形で示唆され、真正面から取り上げられることはないのである

２点目は〈仏教〉という観点である。『夜の寝覚』の女君が出家を常に志し、欠巻部分ではその願いを実現していること、女君の父入道は出家の身で彼女を支えること、欠巻部分には仏道修行に励む父入道の妹や出家した帝に筆が多く割かれていたであろうこと等をふまえれば、『夜の寝覚』を現存部分のみならず欠巻部分にも目配りし包括的に読み解くうえで、〈仏教〉という観点を看過することはできない。作品が持つ特色や独自性を明らかにするためにも、まずは他作品に目を向けるべく「『源氏物語』御法巻の「日」と「露」の情景と『観普賢経』― 紫の上の死の形容表現と光源氏の生―」（『中古文学』110、p48-60、2022 年 11 月）を発表した。

これは『源氏物語』御法巻における仏教受容のあり方について分析しまとめたものである。当該巻では八月一五日の暁、紫の上の葬儀が行われたことが語られる。故・葵の上の葬儀ではその夜の月の姿を覚えていた光源氏だが、今回はそれもわからず「ただくれまど」うばかりであったという。こうした光源氏の惑乱には、『竹取物語』の翁や帝のそれとの重なりも指摘されており、ここではかつてない悲しみに「惑ふ」光源氏の姿が示されている。そのうえで注目したいのは、すぐに続けて「いとはなやか」な「日」とそれに照らされる「露」を眺める光源氏の姿が描出されることである。八月一五日、紫の上を失って惑乱する光源氏の前に、『竹取物語』世界に通ずる「月」ではなく、「日」と「露」の情景が広がるのは何故なのか。本論では、まずこの情景が紫の上の死の形容表現「まことに消えゆく露の心地して…消えはてたまひぬ」と重なるものとして捉えうることに注目し、そこに仏典を介して捉える意義を指摘した。紫の上の臨終表現に『観普賢経』の詩句「衆罪如霜露　慧日能消除」を介在させることで、当該巻で初めて自覚した紫の上の「罪」の消滅ひいては彼女の往生の確証が見えてくる。またそうした〈滅罪〉の情景を光源氏が眺めることで、紫の上の死後の冥福への確信がもたらされるとともに、自身を顧みて出家願望を深める契機となった可能性も指摘した。さらに、この情景が描出されて以降、光源氏は『竹

取物語』の翁や帝のごとくただ惑乱するに留まらず、そうした惑いと出家への志向との間で思考を巡らせる点が注目される。つまり、紫の上の葬儀後、光源氏の前に「月」ではなく「日」が昇り、「露」を照らす情景が広がることで、紫の上の救済が仏典の側から補強されるとともに、その情景は、「惑ひ」のただ中にいた光源氏を、次の境地に赴かせる―惑う我が身を顧み、深い愛執と対峙させんとする―転換点として機能していることを明らかにした。

以上の成果を踏まえて、『夜の寝覚』の作品分析を行うことで作品固有の特色をあぶり出すとともに、作品同士の緩やかな繋がりと断絶を明らかにする予定である。『夜の寝覚』を基点とした文学史の再構築に向けて、細部への目配りと巨視的な把握に基づく研究が今後も必要となろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 高橋早苗	４．巻 110
２．論文標題 『源氏物語』御法巻の「日」と「露」の情景と『観普賢経』―紫の上の死の形容表現と光源氏の生―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 中古文学	６．最初と最後の頁 p48-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高橋早苗	４．巻 68
２．論文標題 『源氏物語』幻巻の「梅」「かざし」の贈答歌―御仏名の光源氏の〈老い〉―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本文学	６．最初と最後の頁 p33-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高橋早苗	４．巻 95(7)
２．論文標題 『夜の寝覚』の心理描写―〈繰り返し〉の手法	５．発行年 2018年
３．雑誌名 国語と国文学	６．最初と最後の頁 p22-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関